

《官話指南》の研究現狀

孫 雲偉

A research about Kuan Hua Chih Nan

SUN Yunwei

要旨

《官話指南》作為第一本日本人獨立完成的北京話教科書，于 1881 年刊行。在初版的基礎之上又衍生出多種增訂版，方言版和外語版。本文主要是研究中日《官話指南》的研究現狀，分為三章。第一章主要是以冰野善寬的研究為基礎介紹《官話指南》的各種版本。第二章和第三章分別探討日本的研究現狀和中國的研究現狀。筆者通過對《官話指南》的研究現狀的整理發現，迄今為止初版的研究居多。相對而言《譯註 聲音重念附 官話指南自修書》等以及民國時期的增訂版《官話指南》並沒有得到系統的研究。

【キーワード】 官話指南 版本 先行研究

目次

はじめに

第一章 《官話指南》の版本

1.1 《官話指南》の初版本

1.2 増訂版

1.3 方言・外国語版

1.3.1 方言版

1.3.2 外国語版

1.4 教科参考書

第二章 日本における《官話指南》の研究現状

2.1 研究概述

2.2 普及の理由

2.3 氷野善寛の研究

2.3.1 著者の研究

2.3.2 版本の研究

2.4 泊園文庫蔵《官話指南》

第三章 中国における《官話指南》の研究現状

3.1 漢語教育上の役割

3.2 《官話指南》の構成

3.3 言語学の研究

3.3.1 語彙の研究

3.3.2 尊敬語の研究

3.3.3 副詞の研究

3.4 文法の研究

3.4.1 「把」構文

3.5 音声の研究

おわりに

はじめに

日本は明治4年（1871年）に清と日清修好条規の締結により、中日関係の発展につれて、中国と外交できる人材の必要を切実に希望する。当時では、中国の標準語として使用しているのは北京官話である。そのために、北京語ができる人材を養成するために、漢語学所を開設し、《官話指南》という本もこの状況下で編纂された。言語特徴も南京語から北京語への大転換を反映した。最初の北京語教科書としての《官話指南》は初版、復刻版、改訂版、などを含め、漢語版本だけ約45版を出版され、その他に訳本版も存在する。集まった先行研究から見ると、最初に《官話指南》を研究した学者は那須清

（1970）である。この論文は「30年代以前の時代に書かれた本書の語彙を30年代の教科書と比較し」¹⁾、語彙の数をまとめて、当時の中国語教科書の語彙の輪郭を明らかになった。

第一章 《官話指南》の版本

1.1 《官話指南》の初版本

《官話指南》は、呉啓太・鄭永邦の共編により、楊龍太郎を出版人として出版された日本最初の北京官話教科書であり、1881年上海で出版され、長年にわたり、日本人や欧米人に使用されてきた中国語会話書である²⁾。王澧華氏（2006）によると、《官話指南》はその当時の清国公史館の翻訳者呉啓太・鄭永邦を中心に、中国の文人黄裕寿、金国璞の指導に従って、通弁見習時代に学習したものと日常生活を結び付け、出来た本であると述べた。それに、日本人が初めて独自に編成した北京官話の教科書であり、明治時代から半世紀にわたって、日本人は中国語を学習する重要な教材になった。そして、日本語訳版、英語訳版、仏語訳版などに翻訳され、影響を大きく与えている。

徐麗氏、石汝傑氏（2010）によると、《官話指南》は漢語版だけ約45版があるが、数年間で出版されたので、内容はそれほど大きく変化がない。主に漢語版、日本語訳本、その他の言語版に分けていると述べた。それに対して、本稿では初版、増訂版、方言・外国語版、教科参考書に分けて整理した。

初版は序・凡例・目録・卷之一「應對須知」・卷之二「官商吐屬」・卷之三「使令通話」・卷之四「官話問答」の四卷一冊からなる³⁾。「應對須知」は挨拶、見舞い、訪問などの短く簡単な会話が構成され、お互いに問答形式をとる。「官商吐屬」は40章で、貸貸、商売、などから構成され、この部分は《官話指南》の半分以上を占めた。「使令通話」は20章で、主に日常生活では主人と従僕の話し合い、客に面会するなどから構成された。そして、文章の中で鄭さんという人物は恐らく鄭永邦自身の可能性もある⁴⁾。「官話問答」は20

¹⁾ 那須清 1970：1頁、2頁。

²⁾ 水野善寛 2010：237頁～238頁。

³⁾ 水野善寛 2010：238頁。

⁴⁾ 徐麗 石汝傑 2010：77頁。

章で、清国公史館の翻訳者は清の官吏との外交交渉であり、そのために、この部分は文言的な言葉が出てきた。

1.2 増訂版

増訂版は金国璞氏によって1903年改訂されている。今度の改訂は「應對須知」が削除され、「酬應瑣談」が新しく追加した。

また、もう一つの増訂版は九江書会に出版されて、内容と形式は初版と同様であるが、当時の九江⁵⁾言葉と違う際、原文の傍に書き入れをしてある。張美蘭⁶⁾氏によると、当時では、九江版の《官話指南》は南方官話の代表として活躍している。

1.3 方言・外国語版

1.3.1 方言版

方言版の官話指南は、上海方言版の《土話指南》、《滬語指南》と広東語版の《粵音指南》、《訂正粵音指南》の四つである。

1.3.2 外国語版

日本人は《官話指南》を学習するために、日訳版も出版した。例えば、呉泰寿が翻訳した『官話指南総訳』である。この版本は改訂版に対応する日本語訳版である。それに対して、改訂版と違い、最後に初版の「應對須知」も翻訳した。

また、飯河道雄は商務印書館版の英語対訳版の中国語部分の《官話指南》を使って、本文の下に日本語を訳出し、《譯注聲音重念附官話指南自習書》を作成した。この本は三冊があり、第一巻は1924年で出版されたのは「應對須知篇、使令通話篇」であり、第二巻は1925年で出版された「官商吐屬篇」であり、第三巻は1926年で出版された「官話問答篇」である。この本は、初学者の自修の便宜ために、難語句には日本語で注解を加え、本文に発音・四聲の圈点及び重念（アクセントを置いて強く発音する）の符号を付けた。

⁵⁾ 九江は江西省の地名であり、“潯”と略称する。古代では柴桑、江州、潯陽を称する。

⁶⁾ 張美蘭（2007）「明治期間日本汉语教科書中的北京話口語詞」《南京師範大學文學院學報》第2期

第三の版本は木全徳太郎が1939年で編纂された『官話指南精解』である。この版本も改訂版の訳本であり、詳細な解説や練習をつけている。以前のようにカタカナで漢字に発音を示すのではなく、wade式の発音で付し、重要な言葉について例を挙げて解釈した。その他に、LE PERE NENRI BOUCHER S. Jによる1887年出版された仏語対訳版であり、L. C. Hopkinsによる1895年出版された英訳版と1902年出版された英語対訳版の三つがあるが、1902年のほうは編著者が記載していなかった。

1.4 教科参考書

尾崎実（1991）には《官話指南》は日本人と西洋人に向かったの教科書だけでなく、中国人にとっても北京語学習の教材であったと述べ、「1918（中華民国7）年2月、廣州福芸樓書局から、《教科書適用訂正官話指南》が出版されている」という記載がある。氷野善寛（2012）は尾崎実の研究を踏まえて、さらに3種類の《官話指南》を発見した。それらは郎秀川により重訂した《訂正官話指南》、上海の書店で販売された《改良民国官話指南》と廈門萃經堂印務公司から出版された《官話指南》である。この3種類の官話指南は、「いずれも非官話地域における「北京語」あるいは「国語」の習得が目的で使用されていたということが推察される。」と述べた。

第二章 日本における《官話指南》の研究現状

2.1 研究概述

《官話指南》は北京語教科書の代表として最大の研究価値を持っている。日中にわたって、《官話指南》については版本、著者、語彙、文法、音声など多方面から研究成果が上げられている。研究視点については日中両国とも主に初版、増訂版を中心に分析していたが、内容としては、日本のほうは《官話指南》の版本、来歴、形成などを中心に研究していて、それに対して、中国では、《官話指南》の副詞、文法、語彙などの研究がより多い。しかし、外国語版と民国時代の増訂版に関しての全般的な研究はまだ見せていない。

本稿では、《官話指南》の研究現状を考察するために、日本と中国の研究に分けて、代表著作を取り上げる。

2.2 普及の理由

鱒沢彰夫「『官話指南』,そして商務印書館の日中合辦解消」(1997)では《官話指南》の刊行と流れを考察するために、1903年までに刊行された対訳、注釈版以外の《官話指南》を検討した。その過程で6種類の《官話指南》はすべて「日本内地で印刷されたものではなく、中国(上海)で印刷されたものである。」ことがわかった。その上で、《官話指南》は長い間で北京語教科書の代表として使用されている理由について以下のように述べた。一つには、《官話指南》は内容からより実用化で、《語言自邇集》に比べて、新しい北京官話を反映した。二つには、形態の面から《語言自邇集》より小さくて、軽便である。三つには、《官話指南》の初版本、増訂版などほとんど中国の上海で印刷されたものである。「上海は、日本から北京までの経由地で、国際的活動の中心地であり、日本の活版印刷の師匠としての「美華書館」の所在地であった」からである。逆に、氷野善寛(2012)は普及の理由について当時では他の書籍とくらべて、《官話指南》が値段もやすいし、手に入りやすい書物であると述べた。

しかし、筆者は日常生活に関わった内容と興味深い話題こそ普及理由の一つではないかと考えている。

2.3 氷野善寛の研究

氷野善寛『近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に』(2012)の博士論文の一部分では各版本の調査と改訂版でなぜ「應對須知」が削除され、「酬應瑣談」が新しく追加したのかという点に着目し、調査を始めた。その過程で著者間の関係と民国時代の《官話指南》を発見された。本稿では著者と各版本の紹介を取り上げる。

2.3.1 著者の研究

《近代來華外国人名辞典》⁷⁾によると、《官話指南》の編者は周知の通り、呉啓太、鄭永邦である。氷野善寛(2012)は《官話指南》の著者である呉啓太、鄭永邦、および《訂正官話指南》の著者である金國璞との関係について

⁷⁾ 中国社会科学院近代史所翻譯室編, 中国社会科学出版社出版, 1981年。

整理した。

鄭永邦（1863-1916）は長崎唐通事の鄭永寧の子である。鄭永邦が東京外語で学んでいるが、東京外語に在籍していた際には、すでに北京官話教育に切り替えられていた。その頃の教科書は《語言自邇集》あるいは《眉前浅話》であり、教師は時期的に薛乃良と龔恩禄であった。卒業後、1880（明治13）年4月、通弁見習として北京公使館に派遣され、1884（明治17）年6月に外務六等属となり、依願免官したがそのまま北京に留り、翌7月御用係として北京公私館に勤務した。1886（明治19）年3月公使館書記生となり、翌年に外務省属となって帰国する。その後は、朝鮮に赴任、1896（明治29）年3月に再び北京公使館に赴任し、1906（明治39）年4月から1909（明治42）年までイギリス大使館に赴任し、1911（明治44）年に再び北京公使館に戻り、1913（大正2）年に一等書記官となり退官し、民国政府で仕事をしたが、1916（大正5）年東京にて死去した。父である鄭永寧は長崎で呉用蔵の末子に生まれ、鄭幹輔の養子となり代々唐通事の鄭家を継ぐ。そして、呉用蔵の第4子である呉碩の養子がもう一人の編者呉啓太である。呉啓太は1878（明治11）年通弁見習として北京公使官に勤務、1881（明治14）年に外務省書記生となる。1885（明治18）年に職を辞し、官費留学生としてベルギーブリュッセル大学に学び、1892（明治25）年外務省試補となり、陸奥宗光外務大臣の秘書官となった。

金國璞は明治時代の中国語教育に深く関わった人物である。「金國璞は同文館出身で1897（明治30）年に来日し、東京外国語学校などで中国語を教授し、1903（明治36年）には文求堂から改訂《官話指南》を刊行した。」と述べた。

2.3.2 版本の研究

《官話指南》の成書過程は、それほど詳しく紹介されていない。これまでの研究を見ると、《官話指南》を編んだ人は日本の呉啓太、鄭永邦であり、「日本人による、最初の北京語教科書」ということが分かっている。

氷野善寛（2012）は六角恒廣（1984）や鱒沢彰夫（1997）の成果を踏まえて、一から整理し、《官話指南》を中国語学習書、方言学習書、国語学習書

の三つに分類して初版及びそこから派生したものについて整理した。その中で、中国語学習書としての《官話指南》は6版があり、そこから派生した《官話指南》11版があり、方言学習書としての《官話指南》は4版があり、国語学習書としての《官話指南》は4版に分けている。以下【表1】のように示す。

【表1】

	書名	編著者	刊年	発行者	印刷地
1-1	《官話指南》	呉啓太鄭永邦	1881年	楊龍太郎	記載無
1-2	《官話指南》	呉啓太鄭永邦	1882年	楊龍太郎	上海美華書館
1-3	《官話指南》	呉啓太鄭永邦	1886年	楊龍太郎	上海脩文活版館
1-4	《官話指南》(重印本)	呉啓太鄭永邦	1900年	楊龍太郎	上海美華書院
1-5	《官話指南》(重印本)	呉啓太鄭永邦	1903年	楊龍太郎	Kelly& Walsh Limited
1-6	《官話指南》(重印本)	呉啓太鄭永邦	1900年	楊龍太郎	福州美華書院
2-1	《官話指南》	九江書會	1893年	九江書局活字印	九江
2-2	《官話指南》Koan-Hoa Tche-Nan Boussole du Language Mandarin (仏語対訳版)	LE PERE NENRI BOUCHER S. J	1887年	Impromerie de la Mission Catholique	Chang-ha (上海)
2-3	《官話指南》The Guide to Kuan Hua with English Translations 英語対訳版	記載無	1902年	Commercial Press (Shanghai)	Commercial Press (Shanghai)
2-4	《官話指南》The guide to Kuan hua : a translation of the“Kuan hua chih nan”: with an essay on tone and accent in Pekinese and a glossary of phrases (英訳版)	L.C.Hopkins	1895年	Kelly & Walsh, LTD (Shanghai)	Shanghai
2-5	《改訂官話指南》	金國璞	1903年	文求堂	東京
2-6	《官話指南総訳》	呉泰寿	1903年	文求堂	東京
2-7	《官話指南精解》	木全徳太郎	1939年	文求堂・田中慶太郎	東京
2-8	譯註、聲音重念附 官話指南自修書 官商吐屬篇	飯河道雄	1925年	大阪屋號書店	大連

	書名	編著者	刊年	発行者	印刷地
2-9	譯註、聲音重念附 官話 指南自習書 應對須知篇、 使令通話篇	飯河道雄	1924年	大阪屋號書店	大連
2-10	譯註、聲音重念附 官話 指南自修書 官話問答篇	飯河道雄	1926年	大阪屋號書店	大連
2-11	官話指南談論新編應用問 題並解答	幸勉	1931年	大阪屋號書店	大連
3-1	土話指南 T'OU-WO TSE-N É BUSSOLE DU LANGUAGE MANDARIN TRADUITE ET ROMANAISEE EN DIALECTE DU CHANG- HAI（上海語訳版）	師中董訳注	1908年	土山湾慈母堂	記載無
3-2	《滬語指南》（上海語訳版）	曹鐘橙菊人甫 訳	1897年	上海美華書館	記載無
3-3	《粵音指南》（広東語訳版）	H. R. Wells	1895年	文裕堂	Hong Kong
3-4	《訂正粵音指南》（広東語 訳版）	H. R. Wells	1930年	Wing Fat & Company	Hong Kong
4-1	《教科適用訂正官話指南》	吳啓太鄭永邦	1918年	廣州科学書局	廣州
4-2	《訂正官話指南》	郎秀川重訂	不明	不明	不明
4-3	《改良民国官話指南》	郎秀川重訂	不明	上海開民書局	上海
4-4	《官話指南》	不明	1916年	廈門萃經堂印 務公司	廈門

水野善寛（2012）によると、1-1 から 1-6 までは《改訂官話指南》出版する前に、外国人中国語学習者が利用した《官話指南》である。1-3 は初版（1-1）の再版であり、1-4 と 1-5 と同系統のものであり、1-5 は浙江図書館所蔵の1923年版と同様である。2-1 から 2-11 までは《官話指南》に翻訳や対訳、改訂版などのものである。3-1 から 3-4 までは方言版である。4-1 から 4-4 までは中国語学習用として使用している《官話指南》である。その中で《改良民国官話指南》と《訂正官話指南》の最大の特徴としてあげられるのは、語彙の釈義や序の漢字に対して反切による注音がなされている点である。

また、《改訂官話指南》が刊行された際「應對須知」が削除され、「酬應瑣談」が新しく追加した理由については「明確な答えを得ることができなかつ

た」と述べた。しかし、調査によって、正音学習教材『正音撮要』という本の一部分は《官話指南》の「應對須知」の内容とほとんど同じである。その上で、『正音撮要』を分析し、「当時の表現に書き直したものを利用していたということ」が一つの理由を推測した。

2.3 泊園文庫蔵《官話指南》

日下恒夫「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵《官話指南》書き入れ」(1974)は関西大学図書館泊園文庫に収蔵している《官話指南》の所有者として、藤沢黄鶴という人が中国語を学んだ状況及び学習の雰囲気と書き入れとの関係について、調査を行った。まず、この版本の特徴について以下のよう

に述べた。

この版本は「大きさ16.8cm×11cm、活字影印本、半葉11行、行33字、全四巻一冊凡93葉。第一葉中央に「官話指南」、右側に「主降生一千九百年」、左側に「光緒二十六年、福州美華書局活版」とある。この版本は初版と同系統であり、藤沢黄鶴旧蔵書で学習際、巻一・巻三の全て及び巻二第一章から第十四章まで「誤植」、「衍字」、「難解語句の説明」、「方言」の書き入れがある⁸⁾。例えば、「您納」を「你」とし、或は「您」と替え、「昨兒」を「昨天」と訂正するなどがある。

また、この書き入れは「黄鶴が1901年南京滞在中に直接二人の中国人から会話を学んだ際の記録である」ことがわかった。その上で、書き入れのこ

第三章 中国における《官話指南》の研究現状

3.1 漢語教育上の役割

徐麗「《官話指南》在日本汉语教育史上的地位与贡献」(2015)は日本人が初めて独自に編成した北京話教科書である《官話指南》は明治時代40回ほど再版され、北京話教科書の代表として、語彙と後世の方に何の影響を与え

⁸⁾ 氷野善寛2010：第3号、243頁。

たかなどの点から漢語教育上の役割を検討した。

まず、明治時代から昭和20年（1945）まで、『官話指南』は中国語を学習する際、必須な教科書として使用されている⁹⁾。そして、英語版、フランス語対訳版、注釈版に翻訳されて、当時では相当な名著である。1885年、有名な学者である辜鴻銘は帰国して、北京語学習用の教科書は『官話指南』である。その後、編纂した『京話指南』の内容と『官話指南』の一部は一致している。そして、スウェーデンのKlas Bernhard Johannes Karlgren編纂した『北京話語音読本』も『官話指南』の一部を引用した。従って、当時では『官話指南』を北京語教科書の代表として使用している。

次に、19世紀以降の北京語を研究の対象として、『官話指南』は豊富な素材を提供した。『官話指南』は、問答形式を使って、最大に19世紀以降の北京語の形式を表したと述べた。

最後に、『官話指南』は近代漢語の語彙、文法を研究対象として、大きな影響がある。語彙の方面は、北京口語だけではなくて、四字熟語、歇後語、新たな語彙なども現われた。徐麗氏（2015）によると、初版と九江書会による出版された『官話指南』を比較して、当時では北京語を代表としての北京官話と九江の南方官話の語彙については、少し差異があることがわかったと述べた。その後、民国時期から教科書として出版された『官話指南』の語彙は側面から時代の変遷を反映された。

3.2 《官話指南》の構成

王澧華「日编汉语读本《官話指南》的取材与编排」（2006）は半世紀にわたって、なぜ『官話指南』は北京語を学習する際、必須な教科書になるかという点を注目し、その理由を解明するために、構成と内容から検討した。

『官話指南』の構成による凡例から最後まで慎重に考えて取ったものであると指摘され、凡例から第四巻までの構成の特徴を以下のように述べた。

凡例は漢語の発音方法の説明であり、張口音、閉口音、撮口音、齒音、牙音、舌音など音声学の術語でもある。特に「所謂」「逢上必倒」「是也」は他

⁹⁾ 六角恒廣（1984）『近代日本の中国語教育』不二出版社

人の経験のまとめであると述べた。例えば、初学华语者，须知有四声，有轻重音（轻音，即窄音。重音，即宽音。），有轻重念，出入气等项…（中略）…この文章は主に、中国語を学ぶ際、「音」として軽重音、軽重念、出入気などを注意しなければならないと指摘された。

第一巻の「應對須知」は初対面、挨拶、見舞い、訪問などが構成され、文章あまり長くない。しかし、交流中でよく使用している日常会話であり、初学習者は知るべきであると述べた。

第二巻では、賃貸、商売、などが構成され、簡単に口答形式ではなくて、最初に物語をしたり、ユーモアな話題を提起したりする。著者はこのようなやり方で学習者に中国語を学習する際、興味を引かせる、記憶にとどめられるという目的で作成したと述べた。

第三巻では主に主人と僕¹⁰⁾の話し合い、客に面会するなどの日常生活を中心に構成された。そして、わざと新たな語彙を増加し、例えば、「面包」、「黄油」など。個々から見ると、著者は構成上に大変苦勞したと述べた。

第四巻の「官話問答」は清国公史館の翻訳者は清の官吏との外交交渉であり、そのために、翻訳者の専門用語である。「官話問答」の中で話し手は中国に来て3年間の翻訳者であり、呉啓太・鄭永邦を指す可能性がある。もし、本当に呉啓太・鄭永邦であれば、自分自身の経験を取材として使用する。これは凡例で「是編分門別類，令学者视之，井井有条，厘然不紊，庶因人因地而施之，可以知所适从」を徹底に実行されたと述べた。

以上から見ると、第一巻から第四巻まで、著者は学習者に中国語の学習興味を引かせるために、日常生活で使った会話を選んで、より理解できると思われる。

3.3 言語学の研究

3.3.1 語彙の研究

吳麗君「日編北京口语教材《官話指南》的言语特点分析」（2008）は《官話指南》についての文法、語彙の特徴を考察するために、現代漢語とのを比

¹⁰⁾「使令通話」の中で主人は日本公館の鄭と呉を指し、従僕は中国人を指す。鄭と呉は呉啓太・鄭永邦のことを連想する。

較し、代詞、指示詞、疑問詞などに分けて分析した。本稿では人称代詞の「咱们」と疑問詞を取り上げて、特徴について以下のように述べた。

まず、『官話指南』の中では、人称代詞「咱们」をすべて「咱们」に書いており、「咱」は人称代詞として使用することではなくて、「多」を一緒に組み合わせ、「多咱」を使用し、「什么时候」という意味を表す。しかし、近代漢語では、「咱们」は「们」の合音字であり、つまり「咱们」は「咱们」の意味をあらわすと述べた。

次に、疑問詞の中で、「哪」はほとんど「那」を書いており、「哪」という語彙はより遅くまで出現し、文中の「哪」は文末語気助詞であると述べた。

最後、語彙の特徴としては北京語を大量に使用された。例えば、「懒怠去」「云山雾罩的」「抽冷子」「这是什么话呢」「搞」などを使った。以上のことから見ると、当時では《官話指南》を中級レベルの北京教科書であり、文中に口語、四字熟語、歇後語¹¹⁾などを使い、北京の土地の特徴的な風土や風俗習慣を反映された。そして、ほとんどの口語、四字熟語、歇後語は現代漢語でも使用していると指摘した。しかし、指示詞に関して、顔峰氏・徐麗氏¹²⁾（2011）は話し手に近いかと遠いによって「这」と「那」を使い、中間の領域がなく、数量詞と複合形式に分けている。《官話指南》において、「那」は主に同じな事物であるかどうかを確認するという役割を働いたと述べた。

3.3.2 尊敬語の研究

《官話指南》は中級レベルの教科書として、基本的な語彙を使用するだけでなく、交流の状況によって、尊敬語と謙讓語も使用している。特に、第一章の「応対須知」では問答形式で大量に尊敬語と謙讓語を使い、これも早期の『語言自邇集』などの教科書と比べて、《官話指南》の一つの特徴であると述べた。顔峰・徐麗「《官話指南》里的词汇和语汇现象」（2014）は語彙の現象について四字熟語、謙讓語、尊敬語などの多方面から例文を取り上げ、その現象を考察した。本稿では謙讓語、尊敬語を取り上げ、以下のように整理した。《官話指南》は漢語教科書として、日常会話を学習するだけで

¹¹⁾ 歇後語は二つの部分から成り、前の文は謎かけのような言葉で、後ろの文は謎解きのようなものである。そして、歇後語は前半だけを言い、後半の意味にあたることができる。

¹²⁾ 顔峰 徐麗（2011）「《官話指南》的代词」《中国語研究》第53号。

はなくて、より上流階級の言語を学習し、丁寧な語彙を使用した。例えば、相手を呼ぶとき、「貴」、「令」、「尊」などを使って、相手に尊敬する気持ちを表す。それに対して、謙讓の気持ちを表すとき、「贱姓」、「敝处」、「失敬」、「赏脸」、「敝国」、「岂敢」、「斗胆」などを使った。しかし、なぜ、《官話指南》は他の教科書より尊敬語、謙讓語などをたくさん使っているか？その答えについて顔峰氏・徐麗氏（2014）は以下のように分析している。

《官話指南》の凡例では「京话有二，一为俗话，二为官话。其词气之不容相混，犹泾渭之不容并流。是编分门别类，令学者视之井井有条，厘然不紊，因人因地而施之，庶可以知所适从。」からみると、当時では使用している北京語は普通人の日常会話ではなくて、官吏たちは使っている言葉である。呉啓太・鄭永邦の仕事の関係で、普通人より、官吏とよく接触し、よいマナーを持っているので、交流の中で尊敬語と謙讓語も自然に言い出した。もう一つ理由は日本語では尊敬語と謙讓語があるので、大量に使うと、日本人中国語学習者にとって、より理解しやすいと述べた。

3.3.3 副詞の研究

徐麗「《官話指南》副詞研究」《中国語研究》（2013）は清末の北京官話についての副詞の特徴を検討するため、時間副詞、範囲副詞、頻度副詞、程度副詞、否定副詞などを分けて、現代漢語と比較した。その結果をみると、《官話指南》の副詞は現代漢語の種類とほぼ一致しているが、清末だけ出現された副詞もあり、早期の近代漢語まだ出現していないので、特別な意義を持っている。本文の副詞はほとんど当時の口語と同じであると述べた¹³⁾。

3.4 文法の研究

3.4.1 「把」構文の研究

馬翼飛氏（2012）によると、《官話指南》では、「把」構文が233例あり、

¹³⁾ 徐麗（2013）の例文によれば、「別」は近代北京語から出てきた新たな否定副詞であり、禁止とやめさせるという意味を表す。清の小説《儒林外史》及び南方方言の中で、「別」を使用しなかった。従って「別」は明以降の北方方言を基づいて出てきた語彙である。そして、向熹（1993）は九江書会版《官話指南》と比較して、その中の否定副詞は「別」使わなくて、「莫」を使用している。従って、当時では、「別」は禁止とやめさせるという意味がない。

その中で「把+O₁+V+O₂」¹²⁾の構文は4例であり、「把+O+VP」¹³⁾の構文は229例である。「把+O₁+V+O₂」の構文は詳細に分けると、述語は「給」や「告诉」しかない。それに対して、「把+O+VP」の構文は「把」構文の後ろに付いた動詞の数によって、简单述語と複雑述語に分けられている。その中で大幅に占めるのは简单述語である。このような簡単な「把」構文を形成した原因は二つがあり、一つ目は、教科書になるという目的を作成したので、複雑な構文であれば、理解しにくくなる。二つ目は目上の人と目下の人との談話なので、ほとんど目下の人に何かをさせるという形式からであると述べた。

3.5 音声の研究

徐麗・石汝杰（2010）「《官話指南》的版本和语言」は《官話指南》における版本と音声上の問題について論じた。

《官話指南》の凡例からみると、著者は音声の学習を重視する。しかし、当時では、現代の音声学の知識と教授法が不足分なところがあるので、学習する際、役に立てるかははっきり言えない。例えば、著者は漢字の「一」は重音を読み、時々軽音を読んだこともあるが、この現象は声調の変化を言っているか、或は他の現象を言っているか、はっきり言えなくて、及び術語の混乱は学習上に困難になり、当時では、全ての教科書の欠点であると述べた。

版本について氷野善寛（2010）と比べて、民国以前で出版した《官話指南》は紹介しなかった。それ以外は氷野善寛とのほとんど同じである。

おわりに

本稿では《官話指南》に関する先行研究の纏めであり、先行研究をみると、今まで初版に関しての研究が一番多かったと思われる。そして、外国語版と民国時代の《官話指南》にふまれている研究はそれほど多くない。特に、中国語教科書としての《訂正官話指南》は漢字に当て反切による注音がなさ

¹⁴⁾ 例1：O₁をO₂にあげる，2例。如：他就叫我把那银子和衣服都给他罢。例2：O₁をO₂に教えてあげる，2例。如：我就把运错了箱子的事情告诉他说了。

¹⁵⁾ 例：我好知会税务司把货船放行。

れている点であり、序の構成は初版と全く一致する箇所はないのは今後の一つの研究課題になるのではないかと思われる。また、《譯注聲音重念附官話指南自習書》を作成した理由、注釈、注音も今後の課題として検討したい。

【参考文献】

(一) 日本における《官話指南》の参考文献

- 1) 那須清 (1970) 「(改訂) 官話指南の語彙」『文学論輯』第 17 号
- 2) 日下恒夫 (1974) 「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵《官話指南》書き入れ」『関西大学中国文学会紀要』第 5 号
- 3) 尾崎實 (1991) 「『官話指南』をめぐる—明治期日中文化交渉史の一側面」『関西大学東西学術研究所報』第 52 号
- 4) 鱒沢彰夫 (1997) 「『官話指南』, そして商務印書館の日中合辦解消」早稲田大学『中国文学研究』第 23 号
- 5) 六角恒廣 (2000) 《日本中国語教学書志》王順洪訳 北京語言文化大学出版社
- 6) 氷野善寛 (2010) 「『官話指南』の多様性—中国語教材から国語教材」『東アジア文化交渉研究』第 3 号
- 7) 氷野善寛 (2011) 「『官話指南』の来歴の一端—『正音撮要』との関係について—」『関西大学中国文化会紀要』第 32 号
- 8) 氷野善寛 (2012) 「近代中国語教育の歴史的研究—『官話指南』を中心に」博士論文

(二) 中国における《官話指南》の参考文献

- 1) 王灃華 (2006) 「日编汉语读本《官話指南》的取材与编排」《上海师范大学学报(哲学社会科学版)》第 3 号
- 2) 吴麗君 (2008) 「日编北京口语教材《官話指南》的言语特点分析」《人文丛刊》第 00 号
- 3) 徐麗 石汝杰 (2010) 「《官話指南》の版本和语言」《開篇》第 29 号
- 4) 馬翼飛 (2012) 「《官話指南》把字句研究」《金田(勵志)》第 11 号
- 5) 徐麗 (2013) 「《官話指南》副词研究」《中国語研究》第 55 号
- 6) 顔峰 徐麗 (2014) 「《官話指南》里的词汇和语汇现象」黑龙江史志
- 7) 徐麗 (2014) 『日本明治時期漢語教科書研究——以《官話指南》、《談論新篇》、《官話急就篇》為中心』博士論文
- 8) 徐麗 (2015) 「《官話指南》在日本汉语教育史上的地位与贡献」《海外华文教育》第 74 号